「茶旅」"こぼればなし"

(46)

日本のお菓子は甘すぎる?!

コラムニスト　須賀　努

30年以上前から海外に出る際、外国人へのお土産は指定がない限り、日本の洋菓子を選んできた。それは自らも美味しいと感じ、特にアジアではウケが良かったからだった。実際『日本の洋菓子は世界一だ』と中国でも、タイでも、インドでも言ってもらえた。和菓子は日本的でよいが、あんこがダメとか、同じようなものがあるので違いが見いだせないので、喜んでもらえる海外在住日本人に渡してきた。

当然台湾でも同じように日本の洋菓子を美味しいと思っているだろう、と長年配っていたが、ある日、8歳の少女から『いつもクッキー有難う。でもね、次からは持ってこなくていいよ』と言われてしまい、本当に驚いた。しかもその理由が『甘すぎて食べられない』のだと聞き、彼女の部屋にはお菓子の箱が食べずに積まれているとの親の証言には、衝撃を受けた。台湾人は甘いものが好きではなかったのか?

台湾茶業関係者に『今度のお茶会に虎屋の羊羹を出したいので買ってきてほしい』と頼まれたが、『基本的に日本の羊羹は甘すぎて沢山は食べられないから、(薄く切るので)30人で1本あれば十分』と言われた。それならなぜ虎屋を使うのかと問うと、『虎屋は台湾でも有名だから、日本茶と一緒に出せば、お茶会の雰囲気を高めるのには非常に効果的だ』と説明され、これもまた結構ショックだった。

台北でお世話になっている葉さんはご主人と一緒に台湾人向けに高級アイスクリームを製造する会社を経営している。その商品には何と鉄観音や烏龍茶、紅茶など、茶葉を入れているところに特色があり、茶葉ごとの特徴がきちんと出ていて驚く。丁寧に製造されており、お茶好きなら一度は食べてみたいアイスだろう。

実際に食べさせてもらうと思いの他甘さがなく、スッキリしていて美味しいと感じる。値段は普通のアイスよりかなり高いが売り上げは伸びているという。葉さんに『何故このアイスは甘くないのか』と聞いてみると『須賀さん、ハーゲンダッツの時代はもう終わったのよ』とさらっと言うではないか。

台湾人は甘いものが好きではなかったのか。素朴な疑問をぶつけてみると、『台湾でも南部の人は今も甘いものを好む傾向があるが、北中部は昔とはかなり変わったよ』と説明され、自らの固定観念に恥じ入ってしまった。確かに台湾のどこにでもあるドリンクスタンドでも、糖分の量を5段階で指定できるようなシステムが多くあり、見ていると、微糖や無糖を選ぶ人が増えているようだ。

ドリンクと言えば、今回1年ぶりにタイに行ったところ、『静岡茶』と表示されたペット飲料が地下鉄のコマーシャルで映像が流れていたのには驚いた。セブンイレブンに探しに行くと、『静岡茶』と言う漢字の文字に富士山も描かれていて、日本茶を全面的にアピールしている。飲料コーナーの中央に置かれており、販売に本腰が入っている様子が窺われた。

写真:甘くない茶葉入りアイスクリーム

ボトルは微糖と無糖の2種類あり、価格はどちらも30バーツ(約100円)とタイの一般飲料などより高いが、「お〜いお茶」などとは同価格となっている。大手スーパーなどでは無糖はなく、微糖のみが置かれており、消費者の意識レベルによる品ぞろえが感じられる。因みにタイ人は渋みを好まない傾向があり、今回発売されたお茶は、渋みがなく、日本人には少し物足りないかもしれないが、地元の嗜好に合わせた作りとなっていた。

この静岡茶を仕掛けたのは、イチタンのタン社長だと聞いた。タン社長と言えば、タイ人で知らない人といないほどの有名人。15年ほど前にタイの茶飲料市場を開拓し、市場シェアの過半を握る手腕を持つ。自らが広告塔となり、商品を売り込み、成果を上げている。今回の静岡茶も如何にもタン社長のアイデア(日本テイストの広告とパッケージ)が随所に発揮されている。

数年前タン社長にインタビューした際、『日本のペット飲料は自社製品より美味しいが広告宣伝に日本テイストがなかった』と指摘されたのを思い出す。同時に『タイの飲料市場はこれから急速に変化する。タイ政府も国民の健康を考慮して、糖分を控える政策を打ち出してくる』と述べており、既にその時点から今日を見据えて準備してきたのだろう。

健康保険政策上必要な糖分の制限、これはアジア各国で起こっている現象であり、そこに所得の向上した各人の意識の高まりが混ざり合って、急速な嗜好の変化に繋がっていくのだろうから、そのあたりの市場にチャンスがあると言えるのではないだろうか。

(すが　つとむ)